『國民新報』1940年8月25日

[主張]　女子教育

　やをげて一をやつてゐるのだ。ももをきして八紘一宇ののにてようといふのである。、、、すべての[を]してのにしようといふのだ。一にしてへばのにをれるをることである。をにして、をすることは、もはやのにはしないのだ。

　だつてこののにあるのではない。むしろ、はにべてのとがである。それはやのからて、れてゐるをし、そのれただけをひいて、まだそのに一のにしようとするからである。

　そののとなるものは、とになることであるが、のもなはれはにすることであり、へののもなはれは、日のとなることふまでもない。しかしてこのことたるやのけでなくてはならぬのであるが、にそのとなるものはである。そのでもである。そののやがののことであるばかりでなく、がはとなり、はにるのも八りはのであるとふ。そのすべからざるはやそののいのだ。

『さん、にかない？』

といふのはにならぬをへるであらう。

『あの、なしてゐてにもかないのよ』

といたちからはれるとしたらどうだらう。のいのは、がしいためだといふ。そのしいはいをますからだ。のも、はとして、はとして、として、として、きがらしきになるやう

まさねばならない。

　だからがだ。たるやないいのがだ。だ。でもいゝ、でもいゝ、一日もく、のにをしなければならない。にをせしめることは、にらぬがあることゝふ。